

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 14

学校名・団体名	川越市立福原中学校
HPアドレス	<a href="http://www.city.kawagoe.saitama.jp/kosodatekyoiku/sho-chu-ko-shien/chugakko/fukuhara/index.html">http://www.city.kawagoe.saitama.jp/kosodatekyoiku/sho-chu-ko-shien/chugakko/fukuhara/index.html</a>
コース	学校支援
活動・研究テーマ	「季語」と生活する子どもの育成 ～「旬」を感じる力～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>子どもたちの学力の低下が叫ばれている。しかし、それ以上に深刻な状況に置かれているのが、季節を感じる力の喪失であると感じる。四季のある国に生まれているが、季節や旬を意識することも少ない。そこで、季節を凝縮した「季語」に注目し、子どもたちの季節を感じるアンテナを高めたいと考えている。</p>	

### 【時期】

1年間(ほぼ毎日)→2017年4月～ 週4時間の国語の授業+週2回以上の公募俳句への応募等

### 【内容】

①毎時間「季語」を感じさせる授業デザイン(季語の紹介+難読語の理解+国語辞書の活用頻度向上)  
→国語の授業で、毎時間「俳句」を1句暗唱させている。季節は、一刻いっこく変化をしている。季語を通して、その変化に気づく<きっかけ>を与える。季語の中には、読むのが難しいものも多数ある。例えば、「虎落笛」(もがりぶえ)「東風」(こち)「翡翠」(かわせみ)「盂蘭盆会」(うらぼんえ)「注連飾」(しめかざり)などがある。これらの言葉は、国語辞書(含む「歳時記」)を活用する絶好の機会となる。言葉は、まず知り、そして調べるという過程を通して、自分のものとなる。その獲得のプロセスをつくるのが、子どもたちに、確かな「季節」を感じる基礎体力となる。言葉を知らない限り、世界は大きく広がらない。

②公募俳句への応募(基本:当季雑詠。季語指定の場合も多数ある。)

→「俳句賞.com」(<http://haikusyo.koubodatabase.com>)等を活用して、数多くのコンクールに応募させた。桜の咲く季節からスタートして、雪解けの季節まで、いろいろな公募に子どもたちの作品に応募させる。作品応募では、その季節の「季語を」用いて応募する「当季雑詠」というものが基本である。つまり、いまだどんな季節なのかを改めて考えて、自分の感じた季節で作品をつくることとなる。そのために、歳時記が相棒として活躍をした。歳時記には、それぞれの「季語」の本意(=深い意味)が書いてある。その解説文は、子どもたちがもっていない深い気づきを与えてくれる。つくる途中で、季節を深める作業がどうしても伴う。伴った回数が多ければ多いほど、子どもたちの季節を感じるアンテナは高くなる。また、コンクールによっては、この季節の言葉で応募をしてくださいというものも多くある。例えば、「桜」というテーマで応募が来たら、校舎に植わっている「桜」をつぶさに見に行く子がいる。自分の見た情報と、歳時記の情報を照らし、より季節を味わい、深めていく活動につなげた。歳時記のある思春期を過ごす。

### 【成果】

①コンクール等、延べ74人入賞(74人/139人→受賞率53.2%)

→毎回の暗唱を通して季語への理解を深め、また数多くのコンクールに応募する過程で子どもは変化する。今年、初年度にもかかわらず過半数の人数がさまざまな賞をいただいた。受賞がすべてではないが、自分を知らない人が、自分の俳句を選んでくれるという枠組みは、子どもたちに強い自信を与える。そして、自己肯定感を高めていく大きな原動力になっていると考える。(関連性については、これがすべてとは言いきれないが……)受賞をしている子の欠席率は、極めて低く皆勤賞の生徒も多い。つまり、自分ではできると言う「支え」を、俳句を通して得ているのではないだろうか。自分の表現を認めてもらうことが、成長期の子どもたちにいい影響を与えている。

②「歳時記」のある生活(歳時記の存在を知っていましたか? YES25.8% NO74.2%)

→核家族化が進み、祖父母から話を聞く機会は、かなり減っているのが現状である。昔から大切にされてきた文化や暦に関する情報が、驚くべきスピードで失われている。子どもたちにアンケートを行った結果、七割強の人数が「歳時記」そのものの存在すら知らない状況であった。今回の助成を通して、1人1冊「歳時記」を手元に届けることができた。ぶ厚い書籍ながら、朝読書の時間であったり、作句するときに相棒として大活躍であった。大人が思っている以上に、子どもたちは季節に関する知識や情報が少ない。その少なさを補ってくれるツールが「歳時記」なのだ。特に知らない「季語」と出会ったときは、驚きとともに、その知識が心に深く刻まれる。もちろん、俳句をつくる時には、その季語は用いられて、なお一層その子の季節感を支える「言葉」となるだろう。先に季語を選んで作りますか?という別のアンケートでは、86.3%の子が先に選ぶと答えている。このことは、自分が使ってみたい/登場させてみたいと思う「季語」がある証拠であろう。失われていく季節感は致し方ない部分もある。しかし、「歳時記」を通して、失われた季語を取り戻すことは、これからの長い人生をより豊かにしてくれると考える。深く「季節」と生活する経験を通して、子どもたちはこの国で大切にされてきた「旬」をもう一度手にすることになる。